



八五
4427
3

去来抄下

修行教



去来曰蕉門に千葉不易此句一時流り乃句との案に
是を二川に下りて流るるも其元を一なり不易流
去るを流るる基を流るる流りを流るる風新を流る
不易ハ古より直り流るる流るる千歳不易といふ
流りハ一時くつ流るる流るる流るるの風を流るる流
今日此風を流るる流るる流るる一時流りといふ
流るる流るる

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

魯町曰俳諧乃基と云いつた去来曰詞よりみくく凡吟詠
するもの品あり歌をよみ一なり其の中よりあるといひ
き一なり其品くをわちきく内時ハ俳諧連歌ハこれ
ら能も然なりとたのつてあつた俳諧一をばをきく
去来をよみいふをよむとて詩や歌や旋頭混本歌
や知れぬ事をいふをよむを俳諧と迷ひて俳諧連歌
といふをよむを忘れり俳諧をもて文をよむハ俳諧文なり
歌をよみ俳諧歌なり身を行く俳諧の人なり唯いつに
見を高く一古をやゆり人々遠くをよむの海ありといひ
ちくくといふといふ昔一がくをり畧量自慢ありといふ

連歌の名目と云ふといふ以故地となりとも乱夢となりとも
一家乃風と云くは一

魯町曰不易の句は為るに去来曰不易の句ハ俳諧の神
ありていす一の物教考なり句なり一時乃物教考なき故に
古今に叶へりたとて

月平柄と云くは一と云ふに因る 宗鑑
らけはくところり花のよー世山 貞室
秋の風俳諧の素系はすこー 芭蕉

是等の類之魯町曰月と因る又云くはも物教考ありすや
去来曰賦比興ハ混階のよにかまきり吟詠の自然なりん

吟もよ〜流もあはれに〜
い〜

魯町曰流行の句い〜
物故ありて〜

むすや〜
此神之〜

あはれ松多〜
浦光肥〜

或は〜

物故あり〜
人か〜
去来曰流を〜

魯町曰不易流行其え〜
坐臥行住屈伸伏仰乃〜
變風乞之姿ハ〜
回〜
去来曰本を〜

謎語をくわれ或を離れよといふもはなはた

曹町曰基より出ると出るといふもいふに去来曰基と云

す〜ハ解〜るか〜し先〜つた念〜ぬる如〜つた

とあけさうお〜りすた〜と先師の風〜い〜ま

貞固の松々門の女ともまほひ

融あり蓮乃葉もまほしく雨をいさ〜素堂

三つらき詩の語又文字の教合〜るも

散花ふた〜ら〜ゆ〜れ〜の夢 幽山

け可き謎なり謎語歌の神もろま〜やを〜る

謎語歌体よりハ〜と〜と〜

曹町曰先師も基よりおさる風体もや去来曰異州の御乃

おはちあつておのり御の〜らに〜ま〜ゆ〜と〜る

〜らにも あら〜んや甲の〜り〜と〜る

後よあなれ二字と捨ら〜り是の〜にあ〜る異体乃句

〜も〜ま〜ゆ〜も〜ま〜ゆ〜此年の〜と〜る

教と説語〜曹町曰不易流の事言説もや先師乃

曹明もや去来曰不易流の事言説もや先師乃

〜の先達を〜る人〜長頭丸ら来多と込〜る

〜く〜海〜り〜角楯や傾けの〜ふ丑の〜

〜水あけて咲せよ天龍寺〜ら〜る〜る

無^くは^らん^ま解^くは^らん^ま句^あら^んま^いは^らん^ま海^故あ^らん^まと^ま一
或^ハ切^者に^尋問^せむ^ハ我^ハ流^語に^上達^する^ハは^らん^ま
人^は自^らも^聞け^るも^然之^始より^一句^ハ流^語と^あら^んま^ハ
他^者を^吟味^のく^らみ^月日^から^んま^ハは^らん^ま切^者に^成る^ハ
と^らん^ま先^師曰^ク今^ハ流^語を^日に^めて^書き^しり^て席^に
の^まん^ては^氣持^をい^はす^吐き^ぬく^ハ公^頭を^落す^ハは^らん^ま也
支^考曰^クむ^ハ流^語を^如来^禪の^とう^今流^語とい^はふ^ハ
祖^師禪^ハら^んま^捺著^すは^らん^ま即^轉す
去^来曰^ク先^師を^門人^ハ教^授す^はら^んま^極め^ハら^んま^示
流^語は^自ら^毎に^念を^入る^物と^あら^んま^又自^ら

と^らん^ま流^意を^らん^ま他^ハ一^句に^らん^ま
十^七字^をなり^一字^もた^らん^ま流^意を^らん^ま流^語を^らん^ま
う^に和^歌乃^一体^{なり}句^あら^んま^流意^をら^んま^一句^にら^んま^一
ま^らん^ま流^意を^らん^ま口^實を^らん^ま一^句に^らん^ま
筆^を迷^ふは^らん^ま同^門の中^もら^んま^迷ふ^ハら^んま^一
先^師曰^ク流^語ハ^流意^をら^んま^一句^にら^んま^一
酒^堂曰^ク先^師曰^ク流^語ハ^流意^をら^んま^一句^にら^んま^一
他^者も^然と^あら^んま^一句^にら^んま^一
先^師曰^ク流^語ハ^流意^をら^んま^一句^にら^んま^一
各^合ら^んま^上手^とい^はれ^る下^手と^いは^れる

許六曰復句ハ取合て他す時き句多く出暮るる然るも
初學者常らばをとりしき一功者も及そは取合不取合の
論うそあし

許六曰復句ハ題の曲輪を越出するは一癖ありしは
かたも然也自然曲輪乃中よりハ天然うて希也

去来曰各句を曲輪の内を越出するは即興感偶
ずも物多きハ内あり然も常に業に内を越出なく
多くハ古人の糟粕なり千里をわけ出す吟する時き句
初學者はよくハ第一等類との初學者の尤思ふべき
事也功も然不及すハ又内外の輪をわくは凡そ能く

句毎曲輪の内なり平此事を示すハ電も便利さけて多かり
と云は便利さけてありと云ふ事ハ今月には皆さるべきと
判りしりしと云ふ事ハ皆さるべきと判りしりしと云ふ事
去来曰他門と蕉門と并一業ハ一業に遠いありと身も
蕉門を景情ともにと有ふと吟守化流を心中に巧まぬ
と見えたりたりと清遠兼夜きくすも然をまきつて
元日新堂ハまきく人出舟小鴨川や二夜の新網子船一つ
と云ふこと一禁烟は遠きなり一洛陽は出舟なり一船
ひし月ハおき事や皆是細工也ハ然りなり
去来曰蕉門の復句ハ一字不通乃田丈十歳以下の小兒も時不

うりてよま句あり却る代門の功者といへば人を是れを
代流まを流乃切者ありと評はしう流れよま句まを
——と見えたり

去来曰詠諧を新意と專みすといへば物に本情を遠く
いふも然るハまゝ其本情にちていへば其品ありたるハ
感時花濺涙惜別鳥驚心或は桜花ちとちる人ありといへ
よまを人の某ても見なくといへばたけひなり感時惜別
大文人の見ざる是名一首乃眼也

去来曰詠諧ハ火とも水ぬいひおすと清拂といへば迷ひて
雪乃降るぬき汗とよまのりといへばまを——と見え

人ありまき火と水とはうりうりといひあすといふも
はるる故なり雪の日に汗とよま一句は能ひの
ハまをいひまをいひの影也

去来曰句業ハ二品あり趣向より入ると又詞道具より入ると
なり初及具より入るとまをいひの影也趣向より入ると
遅吟寡句也さりと業——と見え論る時を趣向より
入るといへば詞をいひの影也和歌者流もは
と見えたり詠諧もあつたらん

去来曰蕉門ハ同業同窻と云ふ事あり是も花吟の禱歌

ふ入る他其れ句也たんとて羊々として相あつて
句と刀の編々隣子ふさるる或ハ杖々みしてて地々々ぬ
とけしうゆる也同電乃句ハちかちかしてけと兄より
生まふしちんハ又ち柄なり

去来曰句ハ句勢との事あり文ニ文勢語ニ語勢ありとの
こととてんてしうよく小穂雪やと云句と先師曰
所あつてと小ぬゆふ津るも他は句勢ありとなり
去来曰句ハ染もも然ありたんとて

妻よよ雛子お身とちやとすは 去来

初きさきつよとよ雛子のころたててはと他はしりうたて

先師曰去来汝いさる句お染とてすや同し事も初いつて
染ありして染し染るなり支考々風姿といふもさし
去来曰句ハ語路といふおあり句とてその事也語路を
盤上と玉のほしるのこく滞なふとて又ま柳の風の
乱るるこく優とねももちもろく人溝川ふた泥の
なる向やしりわたりくたつとたるハいろしそ外巻中
一句二句ハ曲とてせもあつてまもも語路の滞とて
ま嫌ふ也

先師曰幾句ハ昔より極々替り修りて附句ハ之変はとく
よ新むらうハ附物とてさし寸中込を公附とさす日

看破せしむし

杜年日句の位とはいふふ事や去来日新句位を
も踏る事なりたしよき句ありとも位意せしむし
教師の意の句をあけていふ

よき新干菜きしむもくもく

馬よおぬ自は内てろひさ

兼句を人の妻もあは武家町の下女もあは宿屋
同屋新下女なりと見え位をきつるも新也

細き目には花見る人の頬をく

あはき色も新新編らる

兼句言什人の子りさ福なり

白粉とぬれも下比くろい

汲みりや新社のたきも新

兼句のさ福今やの女と見ゆ

尾もさつて霞乃きぬく

月影に霞とやんんんす

兼句いふも新も新の妻と見ゆ

ふす福つんと洗ふあつと

兼句み新新新新新新

兼句町のくも新新新新新新

くまのれん

杜年曰面叙をて疏ると云いふ去来曰くつりひ 死白りも
強陰の暗毒也おもうけを附せし事也むろいおほくハ
と事成事附りそれと面叙を附るといふ事

草菴に志あつく居てハオヤあり
いのちをまづむ撰集乃河治

初を和哥の真像を志くゆくと附り
先師曰前を西り能周との境界とんくまうり
ふれと出に西りと附んを多はれむた 面叙のて
秋一とてかゝる一語のいふと西り能周の面叙

きんじり又人とまをいふれらるあつたをく

秀心れりめにくゆれすう山
内翁の語くと呼ぶ人を語と

先師曰いふと面叙そくおもうけをんとあり面叙の事
支考も書きつり又今合はれ

支考曰附句ハ一句子一句也前句附るとをいふりも
一連誦といひても其場を人其持節等前法の
是人台ありて一句に多ハなき物也

去来曰附句ハ一句子千万也故に誦讀変化極れ
支考う一句子一句といふるも附る場の事なる一附る事

多くなき如也句を一場の月もいづれも有了

先師曰氣色をいふ句とつけても句一 天象地教人事

事本美虫鳥獸のおとつけを敢容みなく多ふ也

支考曰附句ハ附る物なり今所難難きつるはなすうと句

先師の句一句もつゝさるはなす

去来曰附句ハ附る物なり附句ハ附るハ急なり

今所難者附る事と初人の業の格におほえさるは

附る句多し一人も又附る人乃らくむ事と附る

附る句と答はれ却るよく附る句と笑ふやうし

家、支考はなすも多し

去来曰附物もつけ又公附るも附るも及節志れ

附物代るは情をひくは附んは前句は川里白ひ等

なりしてはいつたは處もつ附んは情をひく事也

去来曰蕉門の附句ハ前句の情をひくは増ふは前句ハ

是いふは附場いふは人々其事も信とよく見ると前句

とつまらふし附一

先師曰附物も附る事當時好はふつても附物も附

くくくむとさ附るも附物も付くむハ又も附るも

宇度曰先師十七の附る路通は傳授し附るも白

ま境の門人の教は依て附方を書出し附るも後く

とせぬ、附方の是、まかまり、とて、人の迷ひ、おん、とら、は、
於ら、向、そ、半、お、一、終、お、分、十、七、ヶ、条、と、申、ん、安、え、と、り、是、と、
借、更、と、な、ま、う、と、ま、と、ん、大、津、ま、て、の、ま、と、申、む、お、は、ん
路、通、も、一、其、反、言、紙、拾、ひ、と、り、て、人、を、教、る、も、や、許、六、白、げ、と、
祢、く、ひ、く、る、ハ、千、那、法、師、な、り

去来曰附句ハ何事なくさうくとすやうとすやうとすやうと
ふ心に思業上ま一す附句をばむと苦一ふ事也

去来曰風ハ千変万化とすやうとすやうとすやうとすやうと
體なる正く厚く固なる和なれ剛なる解なるなうとすやうと
速なる如此ハうと鈍く濁ゆる弱く重く薄くおとすやうと

淡く、弱く、驕く、く、言、ま、か、く、の、ま、な、い、趣、一、但、一、
句、を、き、言、趣、あ、る、一、

支考曰附句ハ句妙新言ナリ附る場ニ新言あり

去来曰古風の句を用るにも場よりこり、と、れ、と、古、風、の
ま、ま、は、い、う、言、体、乃、く、と、ま、今、や、一、百、一、

先師曰一卷表より各妙を、一、種、お、ん、ハ、ん、と、す、一、う、お、一、
去来曰一卷面を、一、事、ま、お、他、と、一、一、初、折、の、裏、う、り、と、り
表、ま、お、ま、お、教、お、も、曲、も、お、一、一、羊、う、り、各、妙、の、裏、ま、う、け
て、ハ、さ、う、く、と、貴、お、ぬ、や、一、お、他、と、一、一、末、ま、至、て、は、互、に
退、お、い、て、ま、く、お、る、お、也、お、れ、ま、う、句、お、ん、と、す、一、た、却、句、お、

了くお其ぬおなりさけと未くまじ吟席いふふりき
好き句出来んぞ女理よ止るうそあし好き句と思ひな
しり事一

其角曰一卷子好句九句十句有とも一二句好句あつハ好句
能句とせんしおしつハ却ら不出来なるも然なりいま
好句あつハつらハ随分好句と思ひし

去来曰附物よ附る事 志時嫌ひはれとそあつりとん
一卷子一句二句あつハハ風流なるハ

浪化曰今お雑諧物結多を用ゆる事いへ去来曰同ハ
一卷子一二句あつハ原ハ猿蓑の中ハ侍人いりハ小津門の

鍵も門ちの翁なり此集撰む時おつりおの句まくち
粽持よの句を他へ入つる

去来曰凡吟あつ時を風あり風を必去来は是れ自然の
先師を以てよく見ぬ事ハ一風にまくとまをまのハ去来を
示しおつるたつハ先師の風なりとも一風にあつて浪化
を去つるさゆを却る先師おつるにたつる

社年曰発句お苦患いふに去来曰發句ハ人のものとも
感さるるつらハさあつるハさあつるハさあつるハさあつる
いふき又さあつるハさあつるハさあつるハさあつる

社年曰發句と附句の境いふに去来曰七情万景らつるに

雨ふるまゝの菰句あり 附句ハ常なりたゞハ雪の梅を盛り
てうけしつゝも 菰句ありし雪の身と逢ふはしりやま
菰句也 杜年曰公ふ 雨ふるまゝ皆菰句ありてふり 菰日し
菰句よなるも成くぬとありたゞと

つき出ひや 樋のはまりのひまの居 好春

此句と先師の古比の蛙と同一やんおもしろも
うゝ〜〜く 雪敷なり〜〜さそんもさまり 興もあ〜び
さ〜と 菰句あり〜〜

野明曰句おさひきい〜〜物もや 去来曰さひい句のふ也
閑寂なる句と〜〜んた〜ハ夫人の甲冑と帯〜

残場も働き綿繡をかさり 清喜も侍りても 老の姿さう〜
賑うる句にも 静あゆ句ありもさるも 然なりた〜と

花さや 白まが〜〜と つまあ〜せ

先師曰さひ色よくわ〜〜

野明曰句の位ときい〜〜た〜も 去来曰〜も又一句とあ〜
和の然れたえも〜〜の門

先師曰句の位尋常あり〜〜り 去来曰〜句位を
格のさ〜にあり 句中の理屈をひ或ハ物さた〜〜或ハ
あ〜り合〜る 菰句ハ位〜〜も

野明曰句おさ〜り 細〜〜い〜〜も 去来曰〜り

ハ哀なる句ありてハ細ハたよりな句ありてハ
句好まらり細き句好らるる是も謹句とあはて
いと

十卷も小粒ありぬ秋乃風

先師曰は句志をりあり

多しと麻入てわら余吾の海

先師曰は句細とありと評し好しと也

去来曰無してさひ終細と志をりの事ハ以心傳心とせ

唯先師の評はあけて教ふ所と化をたして明也

先師近化乃年深川と出給ふと近野坂曰といふ

やとり今のそと作し世も先師曰志をりて今の風

なると一め七年もまらるるハ又一変わらむとあり

今年素堂子治の人と傳へて曰蕉翁の遺風天下に

満て漸く変すつふ時とれと昔子とらと同一と

して我と吟舎して一の新风と真りせんともり去来答云

先生の言がけけなく悦び傳る事も兼つて思ひおたも

あつた幸も先生をりてなると二の新风を起さハ

おそくハ一度天下の人とねとらせん志れとも世は

光の波目くうちかきあり今も風雅を遊ふとありいとあも

なると唯詩多ねむひ傳るたると中素堂子も

先師の古友ありて博覧賢才の人なり久しハ世小佛名
そり近來は及らざるを以て終ふといへども又いふは
吐き出さるる人もありといふは本意をまきまきするに

於暮雨卷 噫居士一音書

大尾

太來抄跋

豈岡之璞非人採之則誰知璞之爲玉乎一
日 先生弄二三子游焉得諸幽蘭之下琢
而磨之皓々乎世所謂玉鏡也使對之者心
在塵埃之外則去來之功至是可謂發輝乍
歲矣吾徒愉快其在於斯

井上朗



安永四年乙未三月

井筒屋庄兵衛

皇都書林

播屋治兵衛

本來林

[Faint handwritten notes and a small rectangular stamp in the bottom left corner of the left page.]

